

西洋近代的政治概念とチベット独立運動の接触

民主主義、普遍的人権概念がもたらしたもの

京都大学／人間文化研究機構 山本達也

1 目的

本報告は、主にインドに暮らすチベット難民によるチベット独立運動に焦点を当てる。特に民主主義や普遍的人権という西洋に由来する政治概念を彼らが活用している実態に着目し、それがチベット難民にもたらしている帰結を明らかにする。

2 方法

本報告は、現地での参与観察調査及び関連資料の分析に基づく。その際、民主主義や普遍的人権をめぐる諸研究を参照し、それら研究潮流に本発表の議論を位置づけることで一般的な議論との結びつきを図る。

3 結果

分析の結果、以下の点が明らかになった。まず、民主主義や普遍的人権を自らの状況に適用することで、ダライ・ラマ 14 世らチベット難民たちは自分たちの抱える問題と運動の意味を外部の人々にも理解できる形で提示することに成功した。これにより、彼らは欧米の個人の支援者や支援団体より支持を得ることができ、活動をより大きな規模で展開することができるようになった。すなわち、チベット独立運動という文脈において西洋の政治概念が用いられることで、一定の成果があげられることが明らかになった。

しかし、民主主義や普遍的人権という概念が持つ西洋近代的ニュアンスと、それに則った運動の展開は、チベット難民が立ち向かう相手である中国政府にとって「帝国主義」と理解される。中国にとっては、チベット難民による民主主義や普遍的人権を活用した運動の展開とそれに伴う欧米からの支援とは、むしろ「西洋の概念を絶対化し中国の「内政」問題に干渉する欧米諸国の横暴にさらされる自分たちこそが被害者である」、という論理を展開するきっかけとなっている。つまり、チベット難民が西洋の政治概念で自分たちの状況を整理することは、大局的に見た場合、対立する中国にとって自分たちの政策を正当化する口実を与えていることも明らかとなった。

4 結論

以上の分析を通して、チベット難民によるチベット独立運動への民主主義と普遍的人権概念の活用は、チベット難民の運動に可能性を提供するものである一方、中国側にも「欧米列強の帝国主義への対抗」という自らの立場を正当化するきっかけを与えもする両義的な結果をもたらしていることが明示された。現状において、民主主義や普遍的人権という概念の活用は、チベットをめぐる問題を西洋対中国の問題に還元し、チベット難民の発話の場所を限りなく小さくする結果となっていることが明らかになったとともに、これら概念が文脈ごとにもたらす帰結を精査する必要性を提示するものとなった。